

台所で遅い朝食の支度をしながら、やか
から湯気が出てきたのが見えた。沸騰したら
火を止め、蓋を少し開けて一息おいてからポ
ットに入れる。母が好きなお茶を入れるため
のお湯加減だ。ひとり暮らしが大変になって
我が家に母が同居していた十年間、朝茶が
幸せな日課となっていた。早起きが苦手な母
は、九時過ぎに起きるので、朝茶の時間は私
もゆっくり語らいながら大切に過ごした。

母の部屋でお茶の準備を始めると、母の目
は茶器に釘付けになる。母の湯呑みは、初め
て陶芸教室を体験した時に作ったもので、両
手で包むように持つと気持ち良く手に馴染む
とお気に入りに入った。外面に手で、母の書道の雅
号が書き入れてあり、私はそれが母の正面に
なるように置く。仏様にあげる器、母の器と
私のとで三個並ぶと、ワフワフ嬉しそうに私
の手元を見ている。急須から最後の一滴が落
ちると、母は楽しみでたまらない表情を見せ
てくれるのが私の楽しみだ。私が仏様にあげ

て手を合わせると、さあいよいよ母は姿勢を正す。

「はい、どうぞ。」

と言って母の前に器を置くと、母はもう待たないはずなのに、私に、

「あなた、先に飲んでみて。」

と言う。私の「美味しい顔」が見たいのだ。私は見ている母に、びっくり顔をして美味しいを表現して見せる。

「美味しいか？　美味しいか？」

と言う母を見ると、私はもう笑いを我慢できなくて、一笑いする。そしてようやく母は、目を閉じてお茶を口にする。言葉にできない美味さと嬉しさいっぱい表情を見せてくれる無邪気で可愛い母だ。

仕事と介護に追われていた当時は、気持ちの余裕がなかったが、母と語り合いながら大切に時を重ねてきた。母が教えてくれたお茶の時間は、お茶を頂くだけでなく、人と人との交流を深め、ひとときの幸せを感じることに

ができる。母のお陰で来客には、

「お茶いかがですか？」

と気軽に声をかけることが出来る。私が入れ

たお茶を、

「美味しい。」

と言ってもらえた時は、照れくさい程に嬉し

い。私は花嫁修業など何もしたことがなかっ

たから、母と過ごした日々の中で、お花やお

茶や書を学ぶことができた。どれも母を超え

られるような晩はないが、私にとって母か

ら譲り受けた宝物だ。

そういうえは母の生前、何気なく置いた器が

、名前が側面になっで置かれたことがあった

。その時私があわてて、

「あらら、ごめんね。置き直させてね。」

と言っで、正面に名前を向けて置いた時、母

はニッコリ笑っで、

「あなたはいつもこれが私に見えるように置

いてくれるものね。」

と言っでくれた。母はずっと気付いてくれて

いたことに嬉しかったのが心に温かく残っている。そのお陰で、お茶を差し出したり器を置いたりするときは、器の色や柄を相手の方にとって美しく見える向きで置いてあげるものだと知ることができた。

緑茶で一息、

「一服しないか？」

と声かけ合っていた古き良き時代が思い出される。次々と忙しく負われて生活している現代の人々が、人間関係も育めて、自分をも他人をも大切にできる世の中になってくれれば、いいと思う。

私にとってお茶をいただくことは、母との優しい時間を思い出し、宝物だ。

母が亡くなってからの悲しい日々を、毎朝お茶を入れて語り続けて過ごした。毎日恒例のお茶菓子と一緒にいただき、特別なお菓子の時は、

「今日はお茶もお菓子も格別だなあ。」

朝茶をどうぞ

という母の声が聞こえてくるようだ。

私は忙しいと話せず、に気ぜわしく作業をする性分だから、“ひと息つきなさい”と教えてくれたのだと思う。

朝茶をいただく母との時間は、笑顔あり、慰めありの心の休息タイムだった。苦勞を乗り越えて、晩年を幸せそうに生きる姿を見せにくれた母は、今あの頃のままでの微笑む写真の前に、お茶が置かれるのを楽しみにしている。

「お母さん、おはよう。朝茶をどうぞ。」